

旺文社文庫

アンクル・トムの小屋(上)

ストウ夫人著
大橋吉之輔訳



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

赤尾好夫

【編集顧問】
(五十音順)

伊藤 整 茅 誠司 木村 毅
塩田 良平 中島 健蔵 森戸 辰男

旺文社文庫 アンクル・トムの小屋 (上) 190円
— 全二巻 —



昭和42年4月1日 初版発行
昭和43年6月20日 重版発行
訳者 ** はし きち の ずけ 輔
大 橋 吉 之
発行者 鳥 居 正 博
印刷所 壮光舎印刷株式会社

発行所 株式会社 旺 文 社

東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 269-2111 (代)

4S107-10-, 9(11) © 大橋吉之輔 1967

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

(中村印刷・清水印刷・穴口製本)

落丁・乱丁・不良本はお取り替えます
書店または本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

アングル・トムの小屋 (上)

ストウ夫人著

大橋吉之輔訳

旺文社

序

題名でもおわかりの通り、この物語の各場面は、これまでお上品な上流社会から無視されてきた人種のあいだに設定されている。このエキゾチックな人種の祖先たちは、熱帯の太陽の下に生を受け、独自の性格を子孫たちに伝え続けてきたのだが、それはかたくなで専横的なアングロ・サクソン民族とはひどくかけ離れた性格だったので、長年のあいだに誤解と侮蔑しか招かなかつたのである。

しかし、新たなよりよき日が明けそめている。現代の文学、詩、芸術は挙って、「人間に対する善意」というキリスト教の大きいな中心弦と一体になって世界に影響を及ぼしつつある。

詩人、画家、芸術家は、いまや、平凡ではあるがより品位のある人間性を求めてはそれを脚色し、虚構のもつ魅力を使って、世界の人々を人道化し、そのかたくなな性根を和らげようとしつつあるけれども、それはキリスト教の同胞愛という大原則を発展させていく上で結構なことである。

慈善の手は八方からさしのべられ、虐待の実例をさがし求めては、不正を正し、圧迫され忘れられた身分いやしい人々の苦しみを和らげ、彼らの存在を、世界に知らしめ、同情を呼びさましていく。

この一般的な傾向のなかで、不幸なアフリカもついに日の目を見はじめた。大昔、文明化され進歩した人種を生んだアフリカは、その後なん世紀ものあいだ、開化したキリスト教徒たちの足下に

自由を奪われ、血を流して横たわったまま、いくら憐れみを乞うてもむだだったのである。

しかし、アフリカを征服し、厳然と君臨していた支配民族の心も、ついにアフリカに慈悲の気持ちに向けるようになった。また、弱者を守るほうが、彼らを圧迫するよりずっとりっぱなことだということがわかってきたのである。神のおかげによって、世界はついに奴隷^{どれい}交易をのり越えたのだ！ この作品の目的は、われわれのあいだで生活しているアフリカ人に対して同情心をめざめさせることであり、あまりにも残酷で不正なため、彼らの最良の味方たちが彼らのために試みうるあらゆる努力さえ水の泡にしてしまうような制度、その下にあえぐ彼らがこうむっている不正と悲しみを示すことである。

その際、作者は、よくじぶんが悪いのではないのに、奴隷制についての法律上のことで裁判や困った事件にまきこまれる人々には、なにひとつ悪意を抱くものではない。

作者の知るところでは、気高い精神の持主がよくこういうことにまきこまれるようで、これらの人たちこそ、このような物語に集められた奴隷制諸悪の実例が、言うに言われぬ全貌のなかで表現できる個所の半分にもならないことを、いちばんよく知っていることだろう。

北部諸州では、ここに描かれていることは戯画のように思えるかもしれない。が、南部にはこれらの真実性を知っている証言者がいるのだ。作中に語られているような事件の真実性については、作者がじかに知っている典拠を、いずれ示そう。

時代が変わるごとに、世界の多くの悲しみや不正が償^{つぐな}われてきたように、作中に描かれているような光景がとっくの昔に失^なくなったことの記念としてだけ貴重がられるような時が来ることを希望

するのは、ひとつの慰めである。

文明開化しキリスト教化した社会が、アフリカ沿岸にわが国から法律、言語、文学をひき移すとき、囚われの館で経験した情景がアフリカ人にとって、あのイスラエル人にとってのエジプトのようなものとならんことを、すなわち、彼らをあがない給うた主への感謝の動機とならんことを！なぜなら、政治家は口論し、人々は利害と欲望のぶつかり合う潮流にまかせて右往左往していても、人間の自由の大義は神の御手にあるからだ。ここに神を語ることばがある。

「地に審き^{さば}を定めらるるまで

神はくじけ給うことなし⁽¹⁾」

「神、貧しき者よ、助け手なき者よ、と

呼ばわり給うとき、窮せる者を救い給う⁽²⁾」

「神、彼らの魂を欺き^{あざむ}と暴力よりあがない、
彼らの血は神の御眼に責きものとならん⁽³⁾」

(1) イザヤ書第四十二章第四節。

(2) 詩篇第七十二篇第十二節。

(3) 詩篇第七十二篇第十四節。

目次

序

主要登場人物

第一章	この章において、読者は人間性にあふれた人物に出会う	二
第二章	母	六
第三章	夫として、父親として	三
第四章	トムじいさんの小屋の夜	四
第五章	別の所有者に売られていく奴隷の気持ちについて	三
第六章	発見	七
第七章	母の奮闘	九
第八章	エライザの逃亡	二二
第九章	上院議員も一人の人間にすぎぬらしきこと	二五
第十章	人間商品は運び去られる	二六
第十一章	人間商品がふさわしからざる精神状態になること	二八
第十二章	合法的な取引きにまつわるできごと	二四
第十三章	クエーカー教徒のセツルメント	三三
第十四章	エヴァンジェリン	四四
第十五章	新しい主人	五二

第十六章 トムの女主人と彼女の考え方
第十七章 自由人の防御

解 説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

「アングル・トムの小屋」を読んで

代表作品解題

参考文献

年 譜

あとがき

大橋吉之輔

村岡 花子

挿絵 下高原健二

三六

三〇

三四

三七

(下巻)

(下巻)

(下巻)

(下巻)

(下巻)

(下巻)

(下巻)

主要登場人物

シエルビー氏夫妻 ケンタッキーの大農園主の夫婦。

負債に困り、トムとエライザの息子売る。夫人は人格者。ジョージという一人息子がいる。

ヘイリイ 奴隷商人。買いつたエライザとその子供に逃げられるが、トムをニューオルリーonz紳士セント・クレアに売りつける。

トム 主人公。アンクル・トムと呼ばれる、黒人の人望家。クロウという妻がいる。

サム、アンディ シェルビー家の使用人、ゆかいな黒人のコンビ。

ジョージ・ハリス シェルビー農園近くの別の農園に働く、頭脳優秀な美貌の混血児。主人にその才能をねたまれ、自由の地カナダへ脱走。エライザという混血の美女の夫。

バード上院議員夫妻 エライザの逃亡を助ける。

シメオン・ハリデー夫妻、フィニアス・フレッチャーなど クエーカー教徒たち。ジョージ・ハリスとエライザの逃亡を助ける。

トム・ローカー、マークス ヘイリイの商売仲間で、エライザの追手。

オーガステイン・セント・クレアとエヴァンジェリン 父娘 ニューオルリーonzの富豪。セント・クレアは南部のハムレット。トムを買いとる。エヴァは天使のような美少女。

オフィーリア嬢 ヴァーモント州生まれのこちこちの清教徒で、セント・クレアの従姉。

メアリー・セント・クレア セント・クレアのがまな妻。

ダイナ、マミー、アドルフなど セント・クレア家の黒人の召使たち。

トブシイ セント・クレアがオフィーリアにしつけを任すいたずらな黒人娘。

アルフレッドとヘンリーク・セント・クレア父子 セント・クレアの兄とその息子。典型的な南部貴族。

サイモン・レグリー 暴虐な農園主。セント・クレアの死後、トムを買いとり、ついには殴り殺す。

キャシイ、エメリン レグリーの情婦たち。いずれも逃亡する。

サンボ、クインボ レグリー輩下の黒人の奴隷監督。

第一章 この章において、読者は

人間性にあふれた人物に出会う

ケンタッキー州のP——町でのこと。二月のある肌ざむい日の午後もおそく、設備の整った食堂で、二人の紳士が腰かけて水入らずで酒を飲んでゐた。一人の召使もそこにはいなかった。二人の紳士は、椅子をずっと近づけて、大まじめになにかある問題を議論しているようだった。

いままでは便宜上、「二人の紳士」といったが、その一人は、批判的にみたときに、厳密に言つて、紳士と言えるような人物ではなかった。背の低い、ずんぐりした、粗野で平凡な顔だちをした男だった。そして、他人を押しわけてもまえへ出ようとしている、下層階級によく見られる、肩で風をきって歩くような態度の男だった。身なりははでで、色の多いけばけばしいチョッキを着て、黄色の水玉模様の青いハンカチを首に巻き、いやにはでなネクタイを結んでいた。そうした様子が、いかにもその男の全体の感じにふさわしかった。大きい、ごつごつした手には、指輪をいくつもはめていた。驚くほど大きい、いろいろな色の印章の束をつけた、重そうな金時計鎖を持っていて、話に熱中すると、いかにも得意気に見せびらかし、ガチャガチャ鳴らす癖があった。彼の会話は、自由奔放に、マリー(1)の文法を無視し、ときどき、いろいろなと冒瀆ぼうとく的な言い回しがあったが、それはこの物語において描写を徹底したいという作者の欲求さえも、うちひしぐほどすさまじいものだった。

(1) リンドレイ・マリー（一七四五—一八二六）。スコットランド系米人文法学者で「英文法の父」と呼ばれている。主著「Grammar of English Language」（一七九五）。

その相手であるシェルビー氏は、紳士らしい様子をしていた。家の飾りつけから見ても、その他一般の家政の様子から見ても、なに不足なく暮らしているようだった。

まえにも言ったように、二人は、まじめな話の真最中だった。

「そんなところで話を決めたいのだが」と、シェルビー氏が言った。

「それでは商売になりませんよ——シェルビーさん。絶対に、だめ、だめ」と、客は酒のコップを目のあたりで光にすかして言った。

「まあまあ、ヘイリイ、トムはただの黒人とはちがうんだよ。どこへ出したってそれだけの値うちはあるさ。忠実で、正直で、才能もあり、わたしの農場全体を時計のようにきちんと言理してるんだ」「くろんぼなりの正直ちゅうわけですか」と、ヘイリイは自分でブランデーをつぎ、飲みほして言った。

「いや、ほんとうのことだよ。トムは、やさしく、忠実で、よく物事をわきまえた、信心ぶかい男なんだ。あれは、四年まえにある野外礼拝会があったとき、信仰にはいったんだ。ほんとうに信仰しているんだよ。それいらい、わたしはトムを信用して、じぶんのはなんでも、金も家も馬もすっかり任してあるんだ。この辺一帯を歩き回らせてもいるんだよ。トムは、なにをやらしたって、いつも陰ひなたがないし、几帳面^{きちょうめん}だったよ」

「信心ぶかいくろんぼがいるなんて、信じない者もいますからね」と、ヘイリイは思うままに手を振って言った。「しかし、わたしは信じますぜ。わたしが、このまえオルリー^{オリ}ンズへ連れて行った組

(1) ニューオルリー^{オリ}ンズのこと。ミシシッピ河畔の港町で、当時大きな奴隷市場があった。以後、地名については下巻四三二頁の地図参照。

にいたくるんぼは、やさしい、おとなしいやつでね、あれがお祈りするのを聞くと、礼拝堂に行つたようでよかった。あいつは、わたしに大金をもうけさせてくれましたよ。どうしても財産を処分しなければならぬ男から、安く手に入れたんですわ。それで六百ドルもうけましたよ。くろんぼの宗教心ちゆうやつは、それがほんもので、まちがいなけりや、こりや値うちもんですぜ」

「トムの場合は、いままでにない、ほんものの信仰を持っているんだ」と、シェルビーは付け加えた。「そう、去年の秋のことだった。わたしは、トムをひとりでシンシナチへやつて、代理で用事をさせ、五百ドル受け取ってくるように言いつけたことがあった。わたしは、そのときトムに言つたんだ。『トム、わたしはおまえを信じているよ。それというのも、おまえがキリスト教徒だからさ。おまえがごまかしたりはしないとわかつているからなんだ』とね。トムは、ちゃんともどつて来たよ。そりやもうわかつてた。人から聞いたんだが、そのとき、だれか悪いやつがいて、『トム、おめえどうして奴隷を認めないカナダへ逃げないんだい?』と、聞いたそうさ。トムは、『だんなは、おらを信じていらつした。おらにやそんなことできねえだよ』と、答えたそうだよ。言つとくが、わたしは、彼を手離すのがつらいんだ。トムで、借金の方はすっかり済みということにしてほしいもんだ。きみにも良心というものがあるだろう。ヘイリイ、そうしてくれるだろうね」

「そりや、商売人の持ちあわす良心ぐらいはありまさら。まあ、ご承知のように、言うなれば誓言用にほんのちよっぴり」と、おどけてヘイリイは言つた。「友だちの役にたつことなら、道理に合つてりや、なんでもしますよ。けれど、こいつはちと無理な話です。ちーと無理ですなあ」

(1) オハイオ州にある町。オハイオ川に臨み、この川を境にオハイオ側が自由州、ケンタッキー側が奴隷州であったために、黒人奴隷はしばしばこの川を渡つてカナダに逃じたのである。

そう言ふと、もっともらしく考え込みながら、ためいきをつき、またブランデーをついだ。

「それじゃ、どうすればいいんだね、ヘイリー？」と、シェルビー氏は、不安そうにしばらく黙っていてから聞いた。

「そうですなあ、トムにつけてもらえるような男の子か、女の子はいませんかね？」

「ふん、そんな余分なはいないよ。まったくの話、わたしはやむをえず売るので、奴隷^{どれ}のひとつだって手離^{はな}したくないんだ。本当だよ」

そのとき、扉^{かど}が開いて、四歳か五歳くらいの小さい四分の一混血¹の男の子がはいって来た。その子の姿は、なにか人目を引く美しさといいきようがあった。まわつきたいに細い黒い髪の毛は、艶^{つや}やかになちぢれ^ぢ毛となつて、えくぼのあるまるい顔にたれていた。濃くて長いまつ毛の下では、うるおいのある、輝く大きな黒目が、ものめずらしげに、室内をのぞき込んでいた。緋^ひと黄^{わう}の格子縞^{こうし}のはでな服は、ていねいに作られて、身にびたり合っていたが、それは彼の美しい黒い恵まれたりっぱな姿をうまく引き立てていた。そのほにかんだ、おどけた態度から、主人がいつも甘やかし、大事にあつたことがうかがえ、その子自身、それに慣れ^なつてこになっているようだった。

「やあ、ジム・クロウ！」と、シェルビー氏は口笛を吹き、その子のほうへ、ひと握りの干しブドウをさし出して言った。「さあ、お取り！」

その子は、ごほうびのほうへありつただけの力でかけて行き、主人はそれを見ていながら言った。

(1) quadroon 黒人の血を四分の一伝えている白黒混血児。白人と二分の一混血児 (mulatto) との合いの子。これと白人との混血児を八分の一混血児 (octoon) と呼ぶ。(2) ニグロのことをさす。ある有名な黒人の歌からとつた。米國南部ではニグロ専用車のことを、ジム・クロウ・カーと呼ぶ。

「こっちへおいで、ジム・クロウ」

男の子がやって来ると、シュルビー氏は、その子のちぢれた頭を軽くたたき、あごをなでてやった。「さあ、ジム、このおじさんに、歌って、踊っておあげ」

男の子は、豊かな、すんだ声で、黒人のあいだでよく歌われる粗野で異様な歌のひとつを歌いはじめた。そして、歌に合わせて、両手両足、全身を、あれこれとこっけいに動かしてみせた。

「うまいぞ！」ヘイリイはそう言っ、四つ切りにしたオレンジを投げてやった。

「さあ、ジム。年よりのカジョウじいさんが、リユーマチをわづらったときのように、歩いてごらん」と、シュルビー氏が言った。

とたんに、男の子のしなやかな足は、ぶかっこうなびっここの様子に変わり、背を曲げ、主人の杖を手にし、こどもの顔をあわれっぽくゆがめ、老人のまねをして左右へつばを吐きちらしながら、へやじゅうをよぼよぼと歩き回った。シュルビーも客も、大声で笑った。

「ジム、今度は、エルター・ロビンズじいさんが賛美歌を歌うところをやってごらん」と、シュルビー氏は言った。

男の子は、まるい顔を極端に長くし、大まじめに落ち着き払って、賛美歌を鼻にかかった調子で歌いだした。

「いいぞ！ いいぞ！ なんておもしろいちびだ！」と、ヘイリイは言った。「あの子は珍品だ、いや、ほんとうに。実はですな」と、とつぜん思いついたようにシュルビー氏の肩をたたいて、続けた。「あの子をおまけにつけてくださいよ。そうすりゃ話を決めますから——ほんとうに。こんなおあつらえ向きの話はありませんぜ。さあ、どうでしょう」